

会報  
35号



函館の歴史的風土を守る会会報  
№35 1990.6.15  
発行所 函館の歴史的風土を守る会  
事務局 函館市五稜郭町43-9  
五稜郭タワー株式会社内  
電話 (0138)51-4785  
印刷所 双葉印刷 電話 53-7730番

### 国際観光宣言都市があぶない!!

会長 浜島 国四郎

昨今、よく今日は激変化の時代だと言われています。会は今、その変化に対応できるか、運動の質が問われています。こんな時に非力の私が又会長を引き受けることになりました。会員の皆さんのお助けを頂いて任を完うしたいと思います。よろしくお願ひします。

.....

函館は景観条令を施行し、心豊かな健康な魅力溢れる「まちづくり」を目指し、国際観光都市宣言をしています。ところが、(プラキストンラインで知られる)特有の生態系を蔵している函館山の裾一帯に、函館らしいと言われる眺望景観を売物にした高層のリゾート型マンションが建ち始め、計画が次々と進められています。画家や写真家からも、「何処からみてもマンションが入る」、「これじゃ函館らしいものが失くなるなあー」といった声も出されています。又、この山裾の大事な形質、微気候の変化など生態系への影響も考えられます。それにも増して、そこに住み慣れ親しんで来た人達のあづかり知らぬ所で地価高騰が行われ、そのために地元では様々な問題が起きています。そこでの生活から締め出され兼ねない人達すら出ています。函館の眺望景観にとって函館山、海、港の持つ修景的效果は測り知れない。その最も大事な所が現在投機的商行為の対象とされ、生活環境を始め眺望景観が分断され狭められています。定住者のいない高層マンション群は函館の重荷とならない保証はない。

今こそ私達は先人達の素晴らしかった生き方に学びそれを生かし、更にのり超えて行くためにも、景観条令の施行された精神を思いた出したい。そして「れきふう1号」に近藤先生が残してくれた「歴史的風土を守る」とはどう言うことかの原点に立ち返りたいと思う。

さる5月29日付道新に京都の清水寺が10億円で、隣地のマンション建設から歴史的環境を守るために隣地を買取った記事がありました。一方函館では大町郵便局の例もあります、指定建築物の指定の拒否が起っています。これからも、現在進行中のリゾート型マンション建設を含め色々な事が考えられます。一日も早く函館でもまちづくりのための基金制度とか財団設立へ着手し「どんな形でのまちづくり」かの合意形成の努力を市長さんをお願いし、私共市民も出来るだけの協力をしなければと思います。

.....

#### ◎現在、会として係わっている運動

##### 1. 谷地頭小学校跡の保存活用

運動については先号参照、函館のまちづくりへもつながると考えられるだけに、結果が見えないのが気がかりです。

##### 2. 「函館の西部地区の高層建築を考える会」へ参加 ○参加団体

- 谷地頭15-7マンションを考える会
- 元町地区のマンション建設に反対する会
- 青柳町高層マンション建設規制を求める会
- 元町3番のマンション建設に反対する会

聖ヨハネ教会  
 函館ハリストス正教会  
 函館カトリック教会  
 日本基督教団函館教会

- 函館民宿観光協会
- 青柳町函館山登山口を守る会
- 元町倶楽部
- 函館の歴史的風土を守る会

○運動内容 イ、市長・議長への陳情活動をこれからも、問題を整理しながら続ける予定。ロ、5月31日市長と函館の景観を話す会の開催等々新聞TVでご承知の通りです。

53年会報第一号で「歴史的風土を守る会」とはどんなことか、に就きのべている中で近藤元氏は次の4点を指摘しています。①対象地域の全国化です。②守るべき地は函館のみに限るべきではない、③生活環境の問題としてすすめるべきです、④今日の生活の豊かさの底を流れている歴史的蓄積を大切に保全し、これをどう生かしてゆくかということです。④住民の合意にもとづく保全であってほしい…云々。

## 函館の景色は誰のもの!?

函館西部地区の高層建築を考える会

副代表 小 原 雅 夫

「大手の建築業者は違法建築は建てませんからねー建築基準法や条例に合致している建築物をストップさせる事は難しいですね。日照権?、それをふりかざして裁判で勝つ事はまず不可能ですね。まして眺望権なんかではとてもとても……。まあ住民の交渉力しかありませんね。

看板でも掲げて、反対運動をすとか……。

でも函館の住民はおとなしいし、お年寄りが多いからね。ヨハネ教会上に予定されているマンション建設について、全会一致で市議会が反対決議をし、市長が「法を乗り越えてでも」と言明したニュースを聞きながら、法律相談の時に弁護士が言った言葉を思い出した。2月の中頃だったと思う。

あの弁護士は今頃どう思っているだろう。この4ヶ月の運動の展開はあの時予想すら出来なかった事だ。

### 運動の発端

運動を呼掛けた者の義務として、初めての経緯を簡単にまとめておこう。

アートビュウ元町やライオンズ元町が建てられた時から景観に対する危機意識を強く抱いていた。両者とも気付いた時にはもう工事が始まっており手遅れであった。

しかし、これらマンションを見る度に苛々させられた。土地を持っているというだけで、お金があるというだけで、市民が愛する景色を破壊する事が許されるだろうか。これに対して何もできない自分が情け無かった。今年の1月中頃、家の近くの空地にマンション建設の看板が立った。完成予想図では8階建になっている。いろいろ思い悩んだあげく、2月中頃その周辺の家を回ってみた。どの家も困惑気味であったが、とりあえず嘆願書を出す事が急務と考え、周囲42軒の署名をもらって歩いた。

あまりマンションが問題となっていなかった時期であったので、1軒平均20分ぐらいかかっている。

「どうせ最後には建つんだべさ。」を「何もしないよりはいいかな」と、一人の人間の気持ちを変えさせる時間としては短いほうであろうが、大変に疲れたのを覚えている。

### 運動の展開

その後、業者と説明会の場で渡り合ったり、チラシを配って葉書作戦を展開したりしたが、3月21日谷地頭のマンション反対運動が報道され、これが一連の新聞報道の皮切りとなる。4月4日道新の「いさり火」欄に「西部地区よりSOS」として投書した文書が掲載さ

れ、いろいろな方より励ましや共感の電話を頂く。その一つに「昔そういう事をやって挫折した人がいるんだけど、そんな人達と連絡を取って連合でやってみてはどうだろう」のアドヴァイスがあった。

今から考えると、これが谷地頭の問題から西部地区全体の問題へと運動が拡大する一つの節目であった。

そしてこれは谷地頭の問題を多くの中の一つとして埋没させるのではなく、谷地頭の問題をサポートする結果となったのは有難かった。

連合会を作ってもそれに自分達の地域の問題をおんぶさせるのではなく、各自が主体的に行動し、時に必要に応じて連合で行動するという姿勢が大切だろう。

### 市の態度の変化

4月17日連合して市と議会に陳情に行く。

約50名参加。

函館市としては、大陳情団という事で市に与えた影響は大きかったようだ。この後、市はすぐにマンション問題先進地域へ職員を視察に向かわせているし、「合法建築なら、あとは民事の問題」と冷ややかだったのが「住民と業者の間に立って努力します」と姿勢を一転させている。

5月22日、住民の約75%の賛成署名を得て「谷地頭町民宣言」を発表し、これを書いた大看板を出す。

5月31日に「市長と語る市民集会」が開かれ、約350人参加。

ここではヨハネ教会の上に予定されているライオンズマンションに議論が集中した。

このマンション建設計画を知った時、驚き呆れると同時に、函館市民は他はともかく、この件は絶対許さないだろうとの確信を持った。

同僚が言っていた「俺、耶蘇教でも何でもないけどよウ、あそこだけには建てて欲しくないって思うよ。ごく、たまーにしか行かないし、普段別にどうって思っているわけでは無いのに、何でかねー。わかんないけど」函館市民は意識するとしないとに拘わらず、あそこを神聖な場所、函館の顔と思っていたのだ。

この件はマンション業者の横暴さを強烈に市民に印象づけ、マンション反対運動を広く市民に理解してもらう良い機会となった。

市議会や市長が反対と言っても、まだまだ前途は多難である。安心してはいけない。第二、第三の手を考えて運動してゆかねばならない。幸いな事に私達にはアイデアマンが沢山味方についているのだ。(谷地頭15-7 マンションを考える会代表)

## 「金と共に去りぬ」

函館西部地区の高層建築を考える会

事務局長 太田 誠 一

体が疲れている。目が重い。深夜の元町は昔のままに静かに眠っている。何もなかった事にしましょうと町並は無言で耐えているかのようでもある。何か切なげな夜が更けてゆく。

人々のタメ息が浮かんでくる。それは、少し哀しく小さなウズを巻いて消えていくのだ。頭の中を無数の声が行ったり来たりするが、そいつは今ひとつ楽しい音楽に成って行かない。まだまだ回想する時ではないけれど……。

今夜、多くの「言葉」や「想い」がうしろから僕に呼びかけてくる。前を向きながら、ちょっと僕は立ち止まってみた。

先日、近所の85才のおばあちゃんが挨拶に来た。立ちのきをくらい、40年住みなれた元町から出されてゆくのだ。小さくて品の良いそのおばあちゃんは、僕が生まれた時から、ずーっと元町を静かに歩いていた。優しく子供達や花を見守り愛してくれた。僕にとってはレイモンさんの次に、「元町の風景」の様な人だった。僕が子供だった頃の話、微笑みながら教えてくれた。昔の話を聴きながら胸が熱くなってしまった。日吉町に移るのだという。そこからは、「函館山が、こーんなに小さく見えるんですよ」と両手の指で小さな三角を作ってみせた。「今まで、ずーっと、山はこーんなに大きかったのにねー」と今度は頭の上に両手をあげて、大きな三角を作ってくれた。ずっと長い間、生活の中で当たり前だった事が、突然変わってゆく。全てが本人のせいではない。おばあちゃんの淋しげな顔や声に接しながら、普通の人々を追いこんで行く

「経済優先の大きな力」に改めて怒りを覚えたのだ。昨年の秋、このおばあちゃんの横の大きな洋館が、突然消えた。昨日まで当り前にあった建物がマホウの様に無くなったのだ。僕にとっても思い出のある、元町らしさのあるイイ洋館だった。ただの地面になってみると意外に奥行きがあり、200坪程だ。イヤな予感がした。高さが制限されているとはいえ、とにかく大きな何かが出きるのだろうと頭痛がした。2億円とか、いつものようにウワサが砂ボコリのように飛んでくる。その地面もまた、金の匂いがした。それは、と

てつもない大きなキナクササだ。売った人を単に責めるわけにはいかないだろう。しかし、そのおかげで隣の数軒も地上げに巻きこまれ、ギセイとなった。東京在住の地主は、相当ガンバッタそう。しかし、ついに根負けしてしまい、結果、永年静かに暮らしていた小さな人々が追い出されて行く。

異常な金と日本の経済構造が、小さな人々を思いがけない状態へとふり廻しているかのようだ。

函館の西部地区は取り残された町だ。

おかげで、人々はかけがえのない人間的つながり(コミュニティー)を、さりげなく持続して静かに、やさしく生きてきた。

この界わいに、ほれこみ、関西からやってきたペンション経営者がいる。とってもイイ奴だ。旅人の心を大切に、客とふれあい、明るくやってきた。彼はよく「この町のよさは、町並みはもちろんだけど、もう日本には無くなりかけている、人間のフレアイや思いやりがあって、旅ってのは結局、そういう心に出あう事なんだ。人は安らぎを求めて、元町にくるんだ。もー、こんなエートコ他にないもんナー」と、大きな声でシミジミいう。

そうなんだ。長い間かかってできた、コミュニティーの結果に町並みの暖かさが生まれてきたのに。

今や、一方的な経済ロジックの波で、大切な多くの物が失われていっている。住民がどんどんいなくなり、人の関りもオカシクされている。イーコトは、あまり無い。モー、ヤメテクレョ〜。西部にマンションなんてイラナイよ。

時代は変わる。本来は人が時代を変えていく。しかし今は、時代が人を変えていく。ヘンテコな、世の中だ。このマンション事件は、一番銀行がワルイ!!とヒトコト言っておこう。

とにかく、色々な物や人が、「金と共に去りぬ」である。これで、イーのかな〜?

(P.S.) 次のターゲットは旭川だそうです。

気をつけましょう。テゴワイ、デッセ!

## まほろばの風景よ

木 村 訓 丈

「風景」と、私どもは風景のことをいうが、ランドスケープの直訳として伊藤博文あたりが用いた「地景」という言葉とそれと比較すると、一段と風格と詩情がある。これの日本での定着は明治もふたけたになったころかと思うが、風景という言葉そのものは古くからあった。

博文がア・ホントネシー氏(アントニオ・フオンタネージ)の招聘具申の書類に用語として「地景」と記したのが「風景」の前身で、別の箇所には「景色」とも書いてありまだ定っていない。ア・ホントネシー氏のフランス語英語とり混ぜての講義が始って「風景」という表現にやがて固っていくところに、如何にも日本人特有の言葉に対するセンスがうかがわれて楽しくなる。「山水」というジャンルが古くからあって、これも「風景」成立の過程に力を及ぼしていたかも知れない。いずれにしてもヨーロッパ絵画に風景画というもの誕生するはるか以前に、こちら側にはそれが存在していたのであるが、ホントネシー氏と共に西洋流風景画法が導入される必要性のひとつが、工学の一端としてであり、当時維新の世が至急吸収せんとしていた西洋テクノロジーのABCのそれはひとつであったのもおもしろい。その西洋風景画の最初はデューラーの水彩。ルーブルにある「アルコの眺望」がその中の一点で、15世紀後半彼のイタリア旅行の折りに描かれたもの、これが実景の忠実な写実かどうかは知らないが、風景が彼の心に語りかけたことによるのは間違いない。如何に速描の出来る水彩の仕事とはいえ、旅路を急ぐ画家の足をとめ、リュックを開いて用具を取り出すという意欲を持たせるだけの魅力が風景にあったこと。当時の画家は人物の登場しない風景だけの絵は描かなかつたから、デューラーのこの水彩の幾点かはヨーロッパ絵画史に大きなエポックをつくることとなった。今でこそ風景画は独立した分野となっていて私たちはそれを楽しんだり心を洗われたりしている。

自然の中に立って受ける微風とやさしい光が私たちの心を癒してくれるように風景とはまさしく風と光のことであった。人の心に染み透る光と風によってのみ人は清らかさを保つことが辛うじて出来る。絵画が殊に風景画がその光と風を凝縮した形で、しかも目に見える形で示してくれる。身近かで親しみやすいところから言えば、三重松先生・池谷先生の数々の風景画、私たちが函館を描いた風景画を話題にすると、おそらくおふたりの作品のあれこれを思い浮かべながらのことと思う程で、爽やかな色彩とタッチが織りなす決定的な構図は強固このうえなく、しっかりと函館の光と風をとらえている。過ぎ去った時の流れに「若しも」はないが、若しも三重松先生の港から山をのぞんだお作品の中に、三角形の塔屋(とうや・ペントハウスというのだそうだが)を頂いた背の高いマンションがによっきりと幾本も建ちはだかっていたとしたらどうだろう。田辺先生は、第一そのようなペカペカした建物の立つところをお選びになれないことと思うが。しかし、現今のマンションブームでは、函館山を見上げて、それらが目に入らないというポジションとはどこのことか。池谷先生がお亡くなりになられる前にマンションのはしりがあった、お作品の中にもそれが描かれているのをみるが、実際にその場所に立って眺めてみると、先生はなるほど御苦勞なされていて、ぐっとずらして構図を整えておられる。これも「若しも」だが、山から街と海を見下す構図「函館の冬晴」と同じ構図で再度先生が筆をとられるとすると出来てくる作品はどうなるであろう。マンションは金森ビルの端正な姿をかくし、ドックをかくし、海の線を縦に割り、教会を威圧して建つという「見事」な光景となる。まほろばの風景よいづくに、と嘆きたくもなるというものだ。幾本ものマンションが建設中、計画中のものもたくさんあるときく。汚され放題の風景はやがて人の心を蝕む毒素を発生しかねまい。なんとかとどめたいものだ。

— 「国際景観会議ひょうご'90」から—

# 景観の保全と創造

山 本 真 也

5月30・31日と神戸市において、都市景観をどうデザインするかをテーマとした「国際景観会議ひょうご'90」が開催されました。

町並みの保存・保全をテーマとした会議・集会はこれまでもいくつかありましたが、都市デザインの分野でのこの種の会議はまだ珍しいこともあり、国内の各自治体の都市計画担当者、民間の開発担当者、海外の専門家など、700人余りが参加しています。

その会議の中から、函館の現状もふまえつつ、いくつかの点をご紹介しますと、

## 1、新しく生まれた美しさ

吉田直哉・武蔵野美大教授は、記念講演の中で、民俗学者・柳田国男の「何が新しく生まれた美しさで、何が失われた大切なものか」という言葉を引用しながら、「日本では、都市づくりの中で次々と大切なものを失ってきた」とする一方、柳田国男が風景の変貌には否定的ではなく、変貌の中で新しく生まれる美しさについても触れていることも紹介しています。

これはその後の会議の中でも話題になることですが、全体的には、まだ私たちはその新たな美しさを獲得していない状態と言えそうです。

そして、函館のことを考えると、失っていく大切なものについて、それをしっかりと心に留めなくてはならないのはもちろんのこと、歴史的資産の保存・保全とともに、新たな美しさの創造についても、今後論議を深めていく必要があると感じたところです。

## 2、古いものと新しいものとの対面

また、パリの新凱旋門の設計で知られるフランスの建築家ポール・アンドリュエさんは、今後の都市デザインを考えるうえでの重要なポイントのひとつとして、「保存は人の記憶を大切にす意味で必要だが、一方、新しいスタイルは勇気をもって呈示されなくてはならない。古いものと、新しいものを対面させるのが正しいのではないか。」という内容のことを述べています。

これは“保存”と“開発”の双方が刺激しあいながら新たな空間を創るといふ、共存関係をいわんとしているものです。

函館の西部地区においても、保存と開発が共に補いあい、刺激しあいながら成長していくことによって、はじめてその良さを引き出しうるといふことが、これまでの歴史的な建造物の再利用事例などからも言えそうに思うと同時に、これまでは概して“まもる”という視点が中心だった景観論議に、現在はさらに“そだてる・つくる”という視点からの論議を深めることが必要とされているように感じます。

## 3、市民と行政の役割

会議では、市民の意識の問題や行政の役割などについても活発な論議がなされましたが、これらは会議の最後に採択された「ひょうご宣言」の中で、次の様に集約されています。

### ひょうご宣言(抜粋)

- ③ 都市の景観を進化させる主役は、その都市に生活する人です。都市に生活する一人ひとりが、身近なところから、責任をもって、愛着と誇りを持てるような美しく、親しみやすく、個性豊かな都市の景観づくりに努めることが望まれます。
- ⑤ 行政は、良好な都市の景観をつくり出すための技術、情報の普及に努めるとともに、優れた景観をつくり出すための住民や企業の諸活動を積極的に支援するべきです。



西部地区の景観(1989年1月撮影)

さて、景観とは目に映る事象のすべて、つまり視覚的な環境を指すものですが、そのため、誰もが共通に抱えることができる一方、見る人個々の主観もその分多く入り込む領域のため、けっしてその解釈も一樣なものとはなりません。

しかし、景観は常にその時代を反映しながら形づくられていくわけですから、絶対的な正解はないものの、その時代における景観に対する共通理解が、市民の活発な論議の中から形成される必要があると考えます。

市でも近く歴史的景観地域における「デザインガイドライン」を印刷・公表し、その論議の素材を提起することを考えていますが、現在の市民・住民の熱い論議が、身近な環境に対する問題の提起から、将来の優れた景観の創造へと結実していくことを、強く願っています。(函館市都市建設部景観保全係)

## 西部地区よりSOS!!

青函トンネル開通に伴い、その効果・効用が種々取りざたされてきました。当然予測されねばならぬことに残念乍ら識者の大方も言及しなかった事態の一つが西部地区に於ける高層マンションの乱立です。「函館の顔」と言われる歴史的環境が無限に破壊され、今や明日の函館の命運をかける大きな社会問題になっています。これを許した要因は何んであったのか皆さんと考えてみたい。常に市民運動が後手後手にまわり市民にその全容がほの見えた時は危機的状況であることが、あまりにも日常的ですが、それでも矢張り声を挙げなければ、以下は運動の経緯をお知らせし、改めて皆さんの更なるご支援をお願いしたい。

- .....
- 4月4日 道新に「西部地区よりSOS」がのる  
発信者は谷地頭町の小原雅夫氏、その頃元町地区でも同じく高層マンションが問題化した。
  - 4月5日 歴風会として上記問題は全市的な共通なものとしてとらえ相互に連帯し協力の輪をつくるべく呼びかけた。集ったのは谷地頭、元町両地区代表と元町倶楽部、歴風会の各代表者である。
  - 4月7日 谷地頭、元町地区が市長及び市議会へ陳情の予定であったため、その実現にむけ強力に支援することを決めた。当日連合組織づくりへの準備に入った。
  - 4月11日 谷地頭・元町・青柳・末広町・宝来町・民宿協会・元町倶楽部・歴風会の各代表者により「函館西部地区の高層建築を考える会」を発足させた(以下略称・考える会を使用)  
代表に歴風会会長の浜島国四郎  
事務局長に太田誠一(元町地区)
  - 4月17日 考える会として「西部地区における景観条例と高層建築に対する陳情」を市長及び市議会議長になす。  
市長への陳情項目は次の通りである(概要)
    - (1) 現在のマンション建設の急増に対する、市の認識と見解を明らかにすること。
    - (2) 函館市の将来的展望を考慮し、市民と事業者に対し、函館市西部地区歴史的景観条例の精神の通り、改めて函館市長としての「街づくり」宣言を發表すること。
    - (3) 函館市西部地区歴史的景観地域を谷地頭町・青柳町・住吉町・宝来町・入舟地区まで拡張すること。
    - (4) 歴史的景観地域における住商複合地景観ゾーンの範囲と高さの基準値を見直すこと。
    - (5) 建築物の許可に際し行政指導を強化すること。
    - (6) 中高層建築物に対する開発指導要綱を強化、推進すること。
    - (7) 建築協定・景観協定等による住民主体の街づくりを推進すること。  
以上の趣意書を添えて提出、速やかな回答を求めた。
  - 5月24日 考える会・元町・谷地頭・民宿協会・野鳥の会・教会関係者等から再度陳情、同席上で「谷地頭町民宣言」文が發表された。市長に対し「市長と市民と話し合う会」への出席を要請した。同時点で「考える会」は8団体により構成された。(8団体の構成メンバーは一頁目の浜島会長の文をご参照下さい)副代表に小原雅夫(谷地頭地区)、三浦欣一(元町)、村岡武司(元町倶楽部)を決め、事務局員に加藤寛二・越中谷浩子を加え組織強化を計った。当日クローズアップされたのは函館の聖域と伝言されている教会群が立ち並ぶ山麓に本州大手資本(大京)のマンション建設への反対陳情であった。
  - 5月31日 「考える会」主催で市長と市民の集いが青柳小学校で開かれた。受付の印刷物配布数では参加者は350余名という。結果は市側の対応の鈍さに市民の怒りと不満が噴出した。当日、市が明らかにした方策は、①地価の監視区域に指定する、②事前公開制度を導入する。(但し、これは近隣の当事者だけのこと)、③すでに計画された建築に就いても同じく業者を指導する、④建築協定を条例化するなど

であったが、市民の危機感からすると隔靴搔痒の感  
 じであった。

- 6月6日 函館市議会が「元町3番のマンション建  
 設に反対し確認申請の取り下げを求める決議」をは  
 からずも全会一致で決めたことに連動し、聖ヨハネ  
 教会・ハリストス正教会・元町カトリック教会・日

本基督教団函館教会の連名で同地区への建築規制を  
 求める陳情書を市長宛に出すことになった。

会報編集の日程上の都合により6月6日までの経過  
 をもって終えます。これから刻々と変転するであろう  
 事態の推多は各マスメディアでお願いします。

(文責 田尻)

1990年5月24日

## 観光資源の損失に対する陳情書

函館市長 木戸浦 隆 一 殿

函館民宿観光協会  
 会長 長 島 道 尋

函館市は、観光都市宣言をし、観光の街として尽力されていると信じております。  
 私達、民宿を営む者も、観光の一端をになう者として私達なりの努力をして参ったつもりで  
 す。私達は旅人とのふれあいを大切にしてきました。本日は、泊られたお客様の声をお伝え  
 し、民宿業の思いを知って頂きたくお願いに参りました。

なんといっても西部地区の町並みは人気があり、観光資源として一級の値うちがあると思  
 います。函館の大切な宝です。ところが最近、お客様が元町の散策から帰られ、「坂の上か  
 ら見る景色は最高ですね。でも、マンションがとても目立つね。どうにかならないのですか。  
 教会を写真に撮ってもバックがマンションじゃ絵にならない。この辺も熱海みたいになっ  
 てしまうのですか。高さとか決まったんじゃないのですか。一体、函館市は何を考えてい  
 るんでしょう…。」など、言われ、返事に困り、とても恥かしい思いにかられます。マンシ  
 ョンの問題に気付き、文句を言う人がたくさんいるのです。観光客がこられてもガッカリし  
 て帰り、二度と来なくなるケースが増大しそうで、私達は強い不安を覚えます。

札幌の時計台のように、函館の教会のまわりにもビルが立っていったら大変です。旅行者  
 が何を求めて函館に来るのか考えて頂きたいものです。函館の魅力のひとつとして、人と人  
 とのふれあいの暖かさがあると思います。

今や失われつつある、そういう地域のコミュニティも少しずつ壊されていくように感じら  
 れます。各地域のもつ、人間や環境の豊かさこそ基本であり、それらがよりステキな観光へ  
 つながるのではないのでしょうか。また、お客様で野鳥や函館山の自然を楽しみに来られる方  
 も多く、それらも失われていく様で不安でなりません。

とにかく今、函館は大切な函館らしさを失いかけている様に思われます。

観光都市函館という視点からも、ぜひ早急に明確な態度を示し、明るく豊かな街づくりを  
 おし進めて頂くよう切に希望致します。

# 「吉野山」

佐藤恒子

「困ったなあー 吉野山の桜が終わってしまう。」とぼやく主人。今年の春は早く、花は予定より10日~20日も早く開花した。

予定していた念願の吉野山の桜は、訪れた時は散っていた。遅咲きの八重桜が、私達をなぐさめて、迎えてくれた。

春4月、山麓の下千本・中千本・上千本と、次々と咲いて行く様は、桜花爛漫という形容がピッタリであろう。

役の行者が、大峰山を開山した時、桜の木に蔵王権現を刻んで祭ったという。それ以来信者による桜の献木が今も続いて全山に色々な桜が咲くようになったという。

吉野駅より古いケーブルで降りた所から少し歩くと銅の鳥居(重文)があり、くぐって200米の所に、金峰山寺の仁王門(国宝)が見える。重層入母屋造り高さ20米もある。門をくぐると素木造りの本堂が有名な蔵王堂(国宝)が四辺を圧してそそりたっている。高さ(34米)の重層入母屋造り、屋根は、桧皮ぶきで木造建築では東大寺大仏殿に次ぐ大きさという。吉水神社の階段を上り(階段の両脇が埋められて、車で登れるようになっていた。時代ですネエ)門をくぐった所が、吉野で一番桜がよく見える「一目千本」の場所

である。上・中千本を眼下にお花見出来る所で、お花見時期には一時間500円の休憩料がとられるそう。途中寸胴の赤いポストを眺めながら、大日寺・勝手神社を拝観、竹林院前よりバスに乗り金峰神社迄行く。急な坂をあえぎ々歩く。日頃の肥満がひびく。水分神社(重文・桃山・三間社造)を参拝。三社一棟造りの珍しい建築である。拝殿・廻廊・楼門など華麗な建築である。

「ホーホケキョ」どこからともなく聞えて来る鶯の声にさそわれ、杉本立の中を歩く。前日の雨ですべる坂道を歩く事しばし、足の速い主人は見えない。途中展望台があった。登るのを考えていると、道端の人に、「人生のうちの5分」といわれ、なる程と自分に云いさせ重い足を引づり登った。

「わー」素晴らしい展望、吉野のお山の大パノラマ、感動した。来てよかったと。

山の中にひととき大きく見える金峰山寺。立派で威厳のあるお寺である。如意輪寺を拝観し駅へ。近鉄自慢の「サクラ・ライナー」にて帰途に。

何を見ても何百年、道端のお地藏さんにも歴史の重みを考えさせられた。歴史と調和し生活をするそこに住む人々の暖かい心が感じられる吉野だった。

(当会々員・道南女性史研究会メンバー)

## 事務局だより

- ☆ 1月27日 「近代建築の保存をめぐる」につき、越野 武 北大助教授の講演会を開き谷地頭小学校木造校舎への一層の理解を深めた(歴風会と谷地頭小学校々舎の保存と活用をすすめる会が主催した。)
- ☆ 2月15日 北海道住宅都市部まちづくり推進室による研修会で工藤事務局長が「良好な景観・環境の形成をめざして」の講演を行った。
- ☆ 3月10日11日 新潟で「90全国ウォーターフロントサミット インNIIGATA」が開かれ工藤事務局長が参加した。参加団体は16団体で北は小樽から南は那覇まで
- ☆ 3月17日の勉強会で講師の近江幸夫氏から「五稜郭と函館を結ぶ古道」と題する興味深い話をうかがった。
- ☆ 4月4日以降の西部地区のマンション問題に対する

経過等については本会報6・7頁をご覧ください。

- ☆ 6月2日 平成2年度定期総会で決算・予算・事業計画等が承認された。なお会長に浜島国四郎、副会長に落合治彦、田尻聡子、高瀬則彦、監事に久住盛(新)、岡田祝津子、事務局長に工藤光雄が選ばれた。「西部地区に於けるデザインガイドライン」と題し山本真也氏(市の景観保全係)に記念講演をしていただいた。市民多数参加し活発な意見交換があった。

### ＝編集後記＝

会報発行がおそくなりました。お詫びしながらお届けします。今号に木村訓丈画伯はじめ超お忙が氏の皆様から玉稿をいただき唯唯、感謝の思いで一杯です。(田尻)

#### …会費納入のお願い…

会費未納の方、よろしくお願ひします。  
郵便振替一函館630  
又は、拓銀昭和通支店 026-293-407  
宛先は、函館の歴史的風土を守る会  
住所は、千代台町20-18